日本鐵鋼協會記事

理事會 (昭和10年度第11回)

開會日時 昭和11年1月8日(水)午後5時

出席者

理事 水谷 叔彦君 渡邊 三郎君 吉川 晴十君 松下 長久君

前會長 俵 國一君 河村 驍君

委員 池田 正二君 石原 善雄君 五百旗頭啓君 田中 清治君 山田良之助君 鹽澤 正一君 廣瀬 政次君

本理事は協議事項第一項に上提の製鐵用術語集增補刊行に付き其增補訂正語を確定する爲め特に委員の出席を要せり。

協議事項

1. 製鐵用術語集の增補版發行に關する件

提案理由 以上は本會創立第10周年記念事業として發行の「製鐵用術語集第1版を今回再び第20周年記念事業として改纂し第2版を發行することとなり兼ねてより委員に於て編纂中の處漸く稿成り只其の補充語を確定する必要上委員會より提案せるものなり。

決議案 製鐵用術語集中增補訂正語選定 以上は委員會提出案を多少訂正して可決し其の整理を委員會に一任となり、松下、吉川兩理事及び委員は午後9時15迄で審議を續け漸く完了せり。

2. 第13回研究部會開催に關する件

決定 (1) 部門 第3回鋼材部會
(2) 主題 鋼材工場に於ける熱經濟に就きて (第2回)
(3) 開會期日 昭和11年4月3日(金祭)午前9時
(4) 會場 帝國鐵道協會々館

4. 俵賞金受領者詮衡委員會開催期日決定
決定期日 來る7月28日(火)午後5時より

5. 日本鐵鋼協會、日本學術振興會聯合講演會開催に關する件

決定 (1) 講演者 北海道帝國大學教授 理學博士 柴田善一君
(2) 演題 製鋼法の物理化學的說明
(3) 日時 昭和11年1月23日(木)午後6時より
(4) 會場 帝國鐵道協會々館三階講堂

6. 入退會者及び會員異動に關する件 (自12月4日至1月8日)

イ、入會者承認數 維持會員 10、 正會員 4、 准會員 13、 計 27 名、(氏名別項)

ロ、轉格者 正會員より賛助會員へ 2 名、 氏名次記
寒川 恒貞君 東馬 三郎君

准會員より正會員へ 3 名、 氏名次記
菊地 環君 村田 巖君 藤澤 勇次君

ハ、退會者承認 次の通り
正會員 片山 國孝 准會員 堤 顯雄 武本高太郎
岩城 靜 吉村 英喜 以上5名

ニ、死亡者 1 名 (氏名別記)

7. 其他會務に關する件

以上を議了し午後9時20分散會す。

臨時評議員會 (昭和10年度第2回)

1. 日 時 昭和11年1月16日午後5時
1. 會 場 日本鐵鋼協會事務所

出席者

理事 水谷 叔彦君 渡邊 三郎君 吉川 晴十君
前會長 今泉嘉一郎君 香村 小錄君 俵 國一君 服部 漸君
評議員 井上禧之助君 岩瀨 德藏君 濱田 彪君 林 猶之介君 門野重九郎君 桂 弁三君 堤 正義君 黑田 泰造君 齋藤 大吉君 澁澤 正雄君 島岡亮太郎君

1. 會長逝去に付き報告

(1) 故會長の病症大要
1. 發 病 昭和10年11月13日夜
1. 病 名 心臟喘息
1. 主治醫 稻田博士 額田博士 石丸醫師
1. 經 過 喘息發作に輕度の腦溢血の症狀併發一時小康を得たるも後一進一退本月3日に至り重態に陷り6日肺炎の症狀を見漸次衰弱を加へ9日朝危篤となり9日午後5時15分薨去す。

(2) 處 置 9日午後零時40分愈々重體の電話に接したるや直ちに理事、前會長へ其旨電信を以て報し一方前者並に委員へ電話にて通達せり。
訃に對しては直に理事、前會長、評議員、委員、名譽會員、賛助會員、維持會員へ通知狀を發し一方東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日の各新聞に廣告掲載せり

(3) 弔 問 1月10日水谷理事改めて本會總代として弔問せり

(4) 供 物 本會名を以て香典、花輪一對を供呈せり。

(5) 弔 辭 齋場に於て本會を代表し水谷理事弔辭を朗讀し厚く哀悼の意を表せり。

(6) 告別式に臨んでは理事、前會長列立に參加す。

(7) 遺族者より禮狀及び日本製鐵會社より禮使を受けたり。

(8) 本會の弔電、弔問を受けたる數13通あり。

2. 決議事項
1. 會長の補缺 來る4月上旬開催の通常總會迄で會長は缺員の儘とし會務は理事代行のことに決定す。

3. 會長逝去に付き會務暫定處置報告

(1) 野田理事逝去に據る抹消を1月15日東京區裁判所へ謄記を了せり。其他三項略す。

編輯委員會 (昭和10年度第9回)

開會日時 昭和10年12月24日(火)午後5時

出席者 水谷理事 吉川理事

委員 池田 正二君 石原 善雄君 田中 清治君 長尾 武雄君 鹽澤 正一君 廣瀨 政次君

協議事項

1. 製鐵用術語集改纂に關する件

增補訂正語を來る1月8日開催の理事會へ全委員出席して決定する事。

2. 第3回工學大會に於ける本會の準備に關する件
3. 第13回研究部會開催準備に關する件
(1) 委員の推薦個所　(2) 討議要項　(3) 照會要項案の作成
4. 鐵と鋼　第22年　第2號　論文原稿決定及び第22年第1號抄錄原稿選定の件

鐵と鋼第22年第2號上掲決定論文

1. 鎔鑛爐の壽命と操業法に就て　松本與三郎君
2. 鑄物彈に發生する「カブサリ」防止に就て　百合　壽馬君
3. 航空發動機用曲軸鋼の選定並に其將來に就て　高瀨　孝次君
4. 各種鐵鋼の存在の下に於ける CO の解離作用に就て　澤村　宏君

以上を審了し午後8時散會す。

會長事務引繼　昭和11年1月23日日本製鐵株式會社秘書係具島君が故野田會長の保管物件を日本鐵鋼協會事務所へ持參され水谷理事へ引渡されたり。

新入會者

維持會員

加盟會社名	代表者	口數
日本亞鉛鍍鋼業株式會社	――――	1
大阪製鍊株式會社	取締役社長　小野　義夫君	1
日本カーボン株式會社	取締役社長　近藤　賢二君	1
大阪製鈑株式會社	――――	1
鑄物機械製造株式會社	取締役社長　酒井良太郎君	1
宮製鋼所	取締役社長　高妻　俊秀君	1
東京ロール製作所	取締役社長　大谷米太郎君	1
富永鋼業株式會社	――――	1
中山鋼業株式會社	――――	1
本溪湖煤鐵股份有限公司	理事長　梶山　又吉君	1

正、准會員

居所又は宛名先	勤務先又は職業	會員別	入會者氏名	紹介者
兵庫縣武庫郡精道村芦屋字大桝八一四	工學士　日本工業新聞社電氣熔接士養成所幹事	正會員	古瀨又三郎君	田中清治 村松橋太郎
東京市杉並區上荻窪二ノ一六〇	三共工業株式會社	〃	佐渡佐太郎君	〃 〃
大阪市西區新町南通三丁目二四	松浦巖商店主	〃	松浦　巖君	〃 〃
大阪府泉北郡鳳町大字大島五九六	東洋鐵管繼手株式會社取締役	〃	池田敏雄君	〃 〃
江戸川區逆井二ノ二二六	日立製作所龜戸工場試驗係	准會員	富田正二君	田中清治
杉並區阿佐ケ谷一丁目八五六	東大、工、冶學生	〃	山下伸六君	〃
兵庫縣加古郡神野村西條	山陽可鍛鐵株式會社	〃	奥村俊治君	村松橋太郎
甲府市東青沼町四一二	工業	〃	丹澤光雄君	〃
淀橋區十二社四二〇　福井方	東大、工、冶學生	〃	北原光雄君	〃
吳海軍工廠製鋼部	吳海軍工廠製鋼部	〃	近澤五次君（イツジ）	大谷益次郎
神戸市灘區將軍通二丁目三三五	神戸製鋼所鑄造工場熔解係	〃	宮崎基繁君	池田英雄
滿洲國鞍山中臺町三ノ七	理學士　昭和製鋼所研究所	〃	三田正揚君（マサアキ）	村松橋太郎
戸畑市澤見戸畑高等小學校前	國產工業戸畑製作所	〃	野村千治君（チハル）	三宅隆一
赤坂區青山南町六丁目一〇八	工學士　特殊製鋼株式會社	〃	平野昇君	佐藤知雄
仙臺市靈屋下七七　北田方	東北帝大、工、金工、學生	〃	森永孝三君	的場幸雄
杉並區高圓寺五丁目七七二	工學士　日本鋼管株式會社	〃	久米道夫君	根本茂
岩手縣釜石町松原　川畑與市方	日鐵釜石製鐵所	〃	生田茂君	本多顯曜

死亡者

本會正會員　一本木清三君は去る一月六日逝去せられたるは洵に痛惜の至りなり玆に謹んで弔意を表す

野田會長の薨去

本會々長野田鶴雄博士は一昨年12月突然喘息に罹られ數ケ月加療保養の結果全治せられたので再び日鐵の激務に就かれ、且つ昨年10月本會第15回講演大會を神戸市に開催するや未曾有の盛況を呈し會長の御元氣な姿を見受けられたのであつたが、大會後1ケ月を經たる11月13日夜突如として喘息發作の再發するところとなり輕微の腦溢血症狀も之に伴つたので、專心療養の結果一時小康を得たるも其後の經過は一進一退の狀態で越年し、1月3日に至るや、病狀頓に惡化し、6日には肺炎症狀を見ると共に衰弱の度を加へ、9日朝には全く危篤の狀態となられ遂に同日午後5時15分薨去せられた。

故野田會長は本會創立に際しては發起人に加はり大正4年2月創立以來評議員として盡力せられた次第で、本會が機關誌「鐵と鋼」刊行に當つては、創刊第1號より第3號に渉り「列强の製鐵事業」に就いて所見を發表せられたのをはじめとして多數の有益なる論文を寄稿せられ又幾多の本會講演會委員會に參與され、本會の發展及斯界の鞭撻に努力せられた。先づ大正15年11月21日より八幡市に於て擧行された本會第2回秋季講演大會並に昭和6年10月の第7回講演大會の實行委員長の重責を果された。之より曩、本會に於ては故會長の斯界に於ける功績を多とし、大正14年10月17日本會10周年記念大會を東京に於て開催するや、製鐵功勞賞牌を贈つて表彰し、降つて昭和9年2月21日の評議員會に於ては、滿場一致を以て、故野田會長を名譽會員に推薦した。而して昭和9年4月よりは本會々長として、會務の樞機に參劃せられ、特に本會事業擴張計畫には多大の盡力を拂はれ、之が資金募集も好調に進み、正に事業に着手せんとするに際して會長を失つたことは痛惜の極である。

葬儀概況

故野田會長の葬儀は12日午後1時より京橋區築地本願寺に於て盛大に擧行せられたが、委員長に中井日鐵社長、委員に吉野信次、齋藤　眞、杉本五十鈴、箕原　勉、小島新一、寺尾　進、新倉利廣、立石信郎、鈴木英雄、水谷叔彦、平田重兵衛、結城豐太郎、青木周三、俵　國一、服部　漸、川久保修吉、氏家長明、神鞭常孝、米山辰夫、福田庸雄、澁澤正雄、景山　齊、太田嘉太郎、長崎榮十郎、北村保太郎、笠原寛美、古井保太郎、吉田健三郎、久保田省三、大河內正敏、黑田泰造、香村小錄、井上匡四郎、保倉熊三郎、荒城二郎、山縣愷介、橋本芳雄、湯川竹三、桑山貞次郎、鵜瀞新五の諸氏擧げられ葬儀萬端を取進めた。

當日は朝より雪模樣の曇天で折柄の寒氣にも拘らず、大井の野田邸には多數の弔客相次ぎ、混雜の裡にも出棺の準備は進められ、定刻の午前10時に至るや靈柩車を先頭に喪主駒子未亡人以下近親の方々の自動車25臺之に從ひ、道を京濱國道にとつて10時40分築地本願寺に到着するや直にエレヴェーターにて柩を本堂の中央奥に安置し其周圍に日鐵をはじめ本會及各關係方面より供へられた弔花を飾り其の餘は本堂より門前に至る迄さしもの廣場も花環の列を以て埋められた。11時30分に至るや本郷區駒込東片町曹洞宗龍光寺の住職、松井承參師主導師となり副導師2名を從へて壯嚴裡に引導の式を了り引續いて日鐵を代表して中井社長、本會は水谷理事代表として弔辭を朗讀せられ、其他數名の弔辭朗讀並に各團體、有志の弔辭弔電の披露あつて後、僧侶の讀經裡に喪主駒子未亡人近親者、列席の葬儀委員の順に燒香が濟み、小憩の後午後1時より告別式を行ふことになつた。門內參道には數個のテントを張りめぐらし、日鐵はじめ各關係方面の有志が弔問者の受付に當つた。來り會する者、岡田首相以下大角海相並に在京の將星多數に上り又本會よりは前會長、理事何れも侍立に參加し、本會々員も亦多數燒香に參り、會葬者 2,000 餘に上り近來の盛儀であつた。午後2時告別式を了るや、柩は祭壇より再びエレヴェーターに移され葬儀委員及參列者の最後の敬禮裡に本堂を下り靈柩車に納められて桐ケ谷の火葬場に向つた。

尙本會に對し弔問及び弔文、弔電を寄せられた方々の芳名は次の通りである。

樋口　實君、片岡　實君、横山芳雄君、梶山又吉君、川崎造船所飛行機工場、東北帝大金屬材料研究所、石川登喜治君、諏訪常次郎君、村上武次郎君、井門文三君、村瀨文雄君、滿洲冶金學會、大阪アグネ工學社、（順序不同）

最後に日鐵中井社長並びに本會の弔辭を附して會員各位と共に故會長の高德を偲び冥福を祈りたい。

中井日鐵社長弔辭

本邦製鐵界の權威野田鶴雄君溘焉として長逝せらる寔に痛恨の至りに堪へず。

君は夙に海軍學生として東京帝國大學に造兵の學を修め職を帝國海軍に奉し海軍工廠製鋼部長、海軍造兵廠長、海軍技術研究所長等の要職に歷任し海軍造兵中將に累進せらる。

大正14年轉して製鐵所技監に任せられ更に昭和9年1月日本製鐵株式會社の設立せらるゝに當り推されて常務取締役に就任し以て今日に及べり。

君の海軍に在るや造艦、造兵の樞機に參し技術の進歩改良に專念すること20有5年以て我が海軍兵器の獨立に寄與せる所頗る大なり就中彈帽及特殊鋼板に關する研究の成果の如き深奥比儔するものなく洵に斯界一世の權威たり。

更に製鐵所技監として技術を統括するに及びては常に眼を各國製鐵業の大勢に注ぎ意を我が國斯業の發展に用ゐ其の豐富なる經驗と該博なる知識とを傾倒して技術の進歩と設備の改善とを圖り以て品質の向上生產の增加に努めたり然かも君は工場經營の根本は經濟の基礎に立脚し冗費の節約と能率の增進とを旨とすべきことを强調し其の實現に力めたり。

而して大形新式熔鑛爐、100 瓲傾注式平爐、復式骸炭爐の如きは何れも我が國に於ける最も嶄新且つ經濟的設備の顯著なるものにして悉く君が盡策する所に係る此の外海陸運輸設備の改善、銑鐵中に於ける珪素分の低下、研究所の實用化等皆君の指導又は發意に係はるものにして工場經營上の功績亦偉大なりと謂ふべし則ち此の間君が在職8ケ年は世界大戰後に於ける鐵鋼界の變動に遭遇し經營の困難亦多大なるものありしにも拘はらず製鐵所が克く斯の難關に處して業績を擧げ鋼材の生產高を倍加するに至りたるは君の力に負ふ所誠に甚大なり。

君は單り製鐵所の爲に貢獻せられたるのみならず常に力を幾多同業者の輔導斡旋に致し製鐵鋼業調査會委員として我が國製鐵鋼國策樹立の審議に參畫し昭和8年官民製鐵事業の合同に當りては資產評價其の他幾多の難問題を解決し以て日本製鐵株式會社の創立に資したる偉績は我が國產業史上に永く牢記せらるべき所なり。

更に當社の常務取締役としては創立忽々の多端複雜なる社務に精勵し社運の興隆に盡瘁せらるゝ所頗る多し今日社礎益々固く設備愈々充實を加へ來れるもの職として君の提撕輔導に由らざるなし。

君が病危篤の報　天聽に達するや畏くも多年の勳功を嘉せられ特に勳一等に陞敍し瑞寶章を授けらる誠に榮譽の極なりと謂ふべし。

君人と爲り明朗濶達春風以て人に接し拮据不撓以て事に當り畢生の念願唯是鐵鋼報國に在り不幸二竪の冒す所となり遂に起つ能はず哀悼何ぞ勝へん今や我が國鐵鋼の業は國防上並產業上益々充實伸張を要し將來君に俟つ所彌々切なるものあるの秋に當り遽に君を喪ふ邦家の爲一大損失なりと謂ふべし只吾等は今後益々我が國鐵鋼業の確立と我が社事業の隆興とに力を盡し以て君の英靈を慰めむことを期す冀くは瞑せよ。

茲に謹みて蕪辭を陳へ以て弔辭となす。

昭和11年1月12日

日本製鐵株式會社々長　中　井　勵　作

本會弔辭

本會々長海軍造兵中將從三位勳一等工學博士野田鶴雄君昭和11年1月9日溘焉として薨去せられ享年62歲知友成な哀惜す。

君は明治8年1月京都府丹波國加佐郡舞鶴町士族野田鷹雄氏の長男に生る明治33年7月東京帝國大學工科大學造兵科を卒業し直に帝國海軍に入り造兵中技士に任ぜられ爾來累進して造兵中將に進む其間吳海軍工廠製鋼部技術及工務主任、同工廠製鋼部長、海軍造兵廠長兼海軍艦政本部技術會議議員、海軍技術研究所長の要職に歷任し大正14年12月海軍を辭して八幡製鐵所技監に任ぜられ昭和9年1月合同日本製鐵株式會社の創立と共に其常務取締役に選任せらる海軍在職中歐米に出張する事前後5回具に各國鐵鋼業を視察し製鋼作業殊に被帽徹甲彈、砲材、甲鈑、彈丸其他高級鋼材の製造に關し造詣あり大正8年6月工學博士の學位を授けらる大正14年八幡製鐵所技監に就任するや同所の發展に對し努力を傾到し業績大に揚る又公務の餘曩に製鐵鋼調査委員製鐵合同調査會委員に擧げられ常に會議に重きをなせり特に本會に對しては創立以來の評議員として又昭和9年4月以來本會々長として盡瘁せられ今日に至る實に君は終始一貫本邦製鐵鋼業の樹立に畢生の力を盡し往くとして可ならざるはなく其斯界に貢獻する處至大なり。

惟ふに近年本邦製鐵鋼業は大なる躍進を遂げたりと謂も前途尙ほ多難を豫想せられ特に現時の非常危機に際し鐵鋼業者の責務重且大なるに際し聲望識見を兼備せる斯界の權威者を失ひたるは邦家の爲に洵に痛惜に堪えざるなり。

茲に本會を代表し謹て哀悼の意を表す君の英靈希くは來り饗けよ

昭和11年1月12日

社團法人日本鐵鋼協會　代表者理事　水　谷　叔　彦